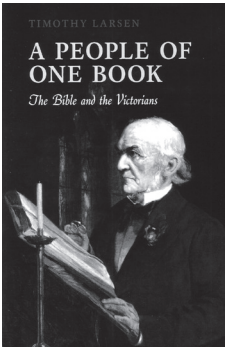
書　評



Timothy Larsen, *A People of One Book: The Bible and the Victorians* (Oxford: Oxford University Press, 2011)

舟川　一彦

この本は、ヴィクトリア朝イングランドを「聖書漬けの文化 (scripture-saturated culture)」(p. 6) として描き出そうとする試みである。つまり、福音主義的プロテスタントは当然として、カトリックから無神論者までを含むこの時代の人々全体のものの考え方や語り方を聖書という書物がいかに強力に規定し、ヴィクトリア朝文化のあらゆる局面に支配的な影響力を及ぼしていたかを示そうというのだ。が、この謳い文句を真に受けてこれをいわゆる〈文化研究〉のカテゴリーに属する研究書として読もうとすると、おそらくほとんどの読者は何ともいえぬ違和感をもってしまうだろう。19世紀末に人類学的な「文化」の概念があらわれて以降、アカデミックな場で〈文化〉を語る時、原始社会のものであれ現代のものであれ、研究者は対象たる文化を基本的に他者のものとして距離を置いて語ることになっている。もちろん、そうしなければそもそも〈アカデミック〉であることの必要条件さえ満たせなくなってしまうわけだ。ところが、著者の書きぶりは、文化を語る際のそうしたアカデミックな前提に沿うものではない。

この本は 10 章と序論、結論から成る。各章は、ヴィクトリア朝社会に存在した宗教的立場のスペクトルを一通りカバーする主要なキリスト教諸宗派と反キリスト教的な知的集団をひとつずつ取り上げ、その集団を代表する思想家や活動家を一人（場合により二人）選び出してその経歴、著作、そして生活全般における聖書との接し方を紹介している。取り上げられる立場と代表者名を挙げておくと、第 1 章アングロ・カトリック（E. B. ピュージー）、第 2 章ローマ・カトリック（ニコラス・ワイズマン）、第 3 章無神論（チャールズ・ブラッドローとアニー・ベサント）、第 4 章メソデ

ィズムとホーリネス教会（キャサリン・ブースとウィリアム・クック）、第5章リベラル・アングリカン（フローレンス・ナイティンゲール）、第6章ユニテリアン（メアリー・カーペンター）、第7章クェーカー（エリザベス・フライ）、第8章不可知論（T. H. ハクスリー）、第9章エヴァンジェリカル・アングリカン（ジョゼフィーン・バトラー）、第10章保守的国教反対派（C. H. スパージョン）という具合だ。結論の中で著者が明かすところによると、当初の計画では二巻本にしてもっと多くの立場を取り上げるつもりだったのだが、出版社側の反対でこの10章に絞らざるをえなかったのだという。このため章として実現しなかった3つの立場（スピリチュアリズム、ユダヤ教、プリマス・ブレズレン）については、結論の中で短い考察がなされている。

ここで各章の内容を順を追って紹介するだけの紙幅はないし、その必要もないだろう。著者自身が認めるように、全体を通じて内容の論理的展開があるわけではなく、10章はたまたま「リサーチを行った順」に並べられていて (p. 7)、すべての章がほぼ同じパターンで構成されているからである。そのパターンは、各章で考察される人物が当該集団の代表たる資格を備えていることを示してみせた後で、彼（女）の経歴を追いながら精神形成の過程をたどり、思想家あるいは活動家として行った仕事、また私生活における思考やその表現が、聖書の広く深い影響下にあったことを実証するというものだ。もちろん、宗派によって聖書の権威の根拠づけや具体的な箇所について解釈のしかたは異なるとしても、（聖書を「告発されるべき本」と呪詛した無神論者たちも含めて）主義信条の如何を問わず、聖書という書物に深く拘泥し血肉となしたという点でヴィクトリア朝人は共通の絆で結ばれていたのだと著者は言う。

ヴィクトリア朝人の聖書との係わり方の特徴――それはこの本に取り上げられた思想家たちすべてに共通するものだが――として、以下のような点が繰り返し言及される。まず何よりも、家庭でも学校でも、幼少期からの教育の圧倒的に大きな部分が聖書を用いて行われたということ。その結果、彼らは聖書中の語句や概念、比喩を使って思考したりものごとを理解したりする習性と、自分の考えを正当化するために頻繁に聖句を引用 (“proof-texting”) する習慣を身につけることになった。その延長上に、聖書

のレンズを通して自分の経験を理解する――聖書中の登場人物や物語になぞらえて自分自身や現在の状況を解釈する――という態度が出てきた。例えばナイティンゲールはしばしば自分の立場を聖母マリアのそれと同一視する。こうして、ヴィクトリア朝人は聖書を解釈するだけでなく、聖書に解釈される人々になったのである。さらに、この本で取り上げられる人物のほとんどは、大人になっても当然のように毎日（朝夕）家族と一緒に、そして一人で、はたまた来客まで巻き込んで聖書を読む習慣を続けていた上に、他人にも同様の習慣を期待し、強く推奨した。（不可知論者のハクスリーが公立学校のカリキュラムに聖書の授業を含めるよう主張したことは、よく知られている。）ことほどさように、一生を通じて、生活のあらゆる局面におけるヴィクトリア朝人の思考とコミュニケーションが、総じて聖書の後ろ楯のもとに行われていたと著者は結論する。

このような論点を呈示するにあたって、著者は自ら「ケース・スタディ的」と呼ぶアプローチで各人物の経歴と仕事を紹介している。このアプローチは、当然のことながら、ヴィクトリア朝文化についての何らかの一般的テーゼを〈論証〉するのには不適当だ。厳密に言えば、この方法で論証されうるのは、取り上げられた 10 人あまりの個人と聖書の係わりにすぎず、この本は（ありていに言えば）各個人についての観察の集合体というしかない。しかも、各章の記述はいわば〈エピソード的〉で、考察対象の人物が聖書に傾倒していたことを示す夥しい数の事実の「例」や文章の「見本」や、「逸話」を、（著者自身いくつかの箇所で認めているように）「無作為(random)」に羅列するという形でなされる。使われる資料は、当該人物自身の著作物と伝記、手紙・日記類、そして、神学や聖書解釈についての専門書がほとんどで、この人物たちの聖書熱とそのコンテクストをなすヴィクトリア朝文化全般を有機的に結びつけ、この現象の〈文化的〉意義を検証する助けとなるような文献はほとんど参照されない。（ただし、その人物本人の著作や伝記的資料は、未刊行の手稿や新聞雑誌を含めて徹底的に調査されていることを、著者のために付言しておく。）

さて、否定的なことばかりを書き連ねてきたけれども、実は、ここまでは前置きでしかない。というのも、この本が何らかのテーゼを論証しているかどうかというのはそれほど重要な問題ではないからだ。そもそも、ヴ

ィクトリア時代が今と比べてはるかに強い聖書の影響下にあったというのは、少なくとも一般論としてはすでに誰でも知っている。その点でこの本に新味があるとすれば、プロテスタント特有と思われがちな聖書熱が一方でカトリックやアングロ・カトリックにまで、他方で無神論や不可知論を標榜する人々にまで及んでいたことを印象づけた点くらいだろう。（これはこれで無視できないこの本の美点ではあるが。）

この書評で私が言いたいことは、上に述べたことにもかかわらず、ヴィクトリア時代の文化状況についてこの本がある重要なことを語っているということだ。ただし、その「重要なこと」は、アカデミックな文化研究の定型的なやり方で「描き出され」たり「論証され」たりはしていない。屁理屈を弄するようだが、著者のいうヴィクトリア朝の「聖書漬け文化」は、著者自身に体現されるという形で読者に示されているのである。

著者ラーセンは、彼が引用するヴィクトリア朝人の夥しい数の文章に含まれる聖書への引喩（アリュージョン）のほとんどすべてに、もともとついていなかった典拠表示を施している。もちろん引喩や駄洒落を自分で種明かしするほど無粋なことはないのだが、そうして黙って差し出された微妙な引喩を嗅ぎつけ識別するというのは、コンコーダンスでできるような機械的な作業ではない。それは著者自身、聖書が体に染みついたヴィクトリア朝の人々と同じように、聖書を諳んじ自家薬籠中のものにしていること、つまり彼らと〈生きられた文化〉を共有していることのしるしにほかならないのだ。たしかに、聖書を丸ごと暗記すること自体は、恐れ入るほどの業ではないのかも知れない。（私の恩師の一人であるピーター・ミルワード先生も、聖書とシェイクスピアならどんな目立たない箇所からの引用でも即座に出典を言い当てることができた。）しかし、ヴィクトリア朝文化の内部に身を置くという態度は、聖書に通暁しているという点以外にも、この本全体を通じて研究対象に対する著者の独特の接し方にあらわれているように思われる。彼はカトリックであろうが無神論であろうが、またクェーカーであろうが、考察する人物の宗教・神学的立場にかかわらず、対象に入り込み感情移入しつつ肯定的に書く。わかりやすく言えば、彼は自分が選んだ10人あまりの人物すべてをあたかも弁護するかのような面持ちで（もちろん顔は見えないが）語るのである。そのうちの一人であるスパージョン

について彼は、「自分と同じ聖書三昧の精神を感じ取った時、神学上の敵をも最大限肯定的に扱った」と書いているが、かくいう彼自身もまたこの「聖書という絆」につながれて、（少なくともこの本を書いている間は）ヴィクトリア時代に生きている人のひとりであるように思えるのだ。

この本が投げかけるのは、現在ヴィクトリア朝文化についての研究がこれほど盛んに行われているにもかかわらず、その文化に内在的に共感するこのようなスタンスが必然的に例外たらざるをえないという問題である。ヴィクトリア朝人について 20 世紀以降に書かれた多くの伝記や研究書に対する著者の論評が批判的な調子を帯びるのも無理はない。アカデミックな学者の仕事に対する彼の不満は、この本の随所ににじみ出している。第一に、聖書に向かう時、インサイダーであるヴィクトリア朝人がそれを違和感なく自分の内奥の感情と同化させたのに対して、アウトサイダーである学者たちは同じ聖書を全然別のものとして――特定の教義や道徳信条の理論的根拠として――見ようとしている (pp. 269–70)。第二に、アカデミックな宗教史学者は、歴史的に新しく目を引く現象であるドイツ風の聖書批評をどうしても過大に重視してしまう。そのあまり、高等批評の成果がまだ広く受け入れられていなかった時代の業績に後の時代の常識や基準を遡及適用して断罪するというアナクロニズムを犯していると著者は指摘する (pp. 271, 297)。第三に、ヴィクトリア朝文化の内部にいて当時の宗教思想の地勢を内側から理解していれば起こりえないはずの笑止千万な思い違い――例えばバトラーの聖書解釈についての F. W. ニューマンの論評を兄 J. H. ニューマンのものと取り違え、しかも何人ものプロの学者たちが誰もその間違いに気づかないというようなこと (pp. 237–38)――が現に起こっている。それと対比して、著者は自分のスタンスをこう説明する――「この本で私は、我々の関心に即してヴィクトリア朝人を尋問するのではなく、彼ら自身の関心事を尊重して耳を傾けるよう努めた」(p. 8)。

この本は、現在主流となっている文化研究の方法に対するオルタナティヴの呈示として読むことができるだろう。我々がそれを真似して成功するかどうか、それはそれで問題ではあるが……。